特　集

アジ研流
読書案内
―研究者が薦める3冊

私が薦める二冊
―歴史の中の中国、生活の中の日本―

任　哲

●内藤湖南著（一九九三）『清朝史通論』平凡社

内藤湖南（一八六六～一九三四）は戦前の京都帝国大学で長年教鞭をとり、日本を代表する東洋学の巨匠である。生前に多くの著書を発表し、そのほとんどは『内藤湖南全集』（全一四巻、筑摩書房、一九六九～一九七六）に収められている。内藤の学問については数多い研究・評論がなされているので、ここで重複する必要はない。内藤の著書は議論の展開が厳密で難しいイメージがあるが、『清朝史通論』はストーリーが軽快で実におもしろい。

この本は「清朝史通論」、「清朝衰亡論」と二つの部分によって構成されるが、今回お勧めするのは前半の「通論」部分である。「通論」は一九一五年八月に京都帝国大学における夏季講演の述記であり、六回の講義がそれぞれひとつの章となる。各回の講義タイトルは第一講から「帝王及び内治」、「異族統一と外交・貿易」、「外国文物の輸入」、「経学」、「史学及び文学」、「芸術」になる。講義の記述であるため、学術書籍と違って非常に読みやすく、講義に関連する様々なエピソードが述べられている。歴史に少しでも興味を持つ人は、これらのエピソード目当てに本書を読むだけでも十分楽しめる。ここでは「通論」の中に出たいくつかの物語をピックアップして読者に紹介したい。

最初のエピソードは、清朝の摂政王と日本の意外なつながりについての記述である。清朝の歴史は「摂政王を以て始まり、摂政王を以て終わる」という不思議な側面があることと、明朝の帝王政治に比べ「天子としては失徳が寡ない」という特色がある、と内藤は指摘する。摂政王についての説明の中に次のようなおもしろい話がある。それは清朝が満州から北京へ乗り込んだときに、越前から松前へ行く予定の船が漂流して満州の地に到着し、長い旅の末に北京で摂政睿親王（順治帝の九番目の息子）に会った話である。当時、北京に入った漂流人の体験は実に珍しく、一行が日本に帰ってからは江戸へ呼ばれ幕府の役所に話をさせられた。また、その長い旅の見聞録が韃靼物語として福井に残っているという。

次のエピソードは、今は極少数の人しか話せない満州語についての話である。清の時代に多くの宣教師が中国にやってきた。しかし彼らがいきなり漢文を習得するには困難であったため、満州語を先に勉強した。満州語は文法的にそれほど精密ではないので、漢文より分かりやすかったのが最大の理由である。そこで、中国の事情を知る為に、宣教師はまず満州語から研究するようになった。したがって、中国が世界的に知られる過程の中で、満州語が深い関係を持っているという内藤の指摘はとても新鮮である。さらにおもしろいのは、文化年間にロシアの船が長崎に到着し、日本に貿易を求める際、提出した手紙はロシア語と満州語で書いてあった。しかし、当時の日本には満州語を読める人がおらず、これをきっかけに満州語の研究が日本で始まったのである。

もうひとつのエピソードは喇嘛教の意外な役割についての記述である。それは明の末に袁崇煥という有名な将軍が、清と戦争をしたり和睦をしたりするときに、その間の使者の役目をしたのが喇嘛の坊さんであったことである。当時の清朝では既に喇嘛教が信仰されていたので、袁崇煥は喇嘛を利用して「外交」を行ったのである。清朝が天下をとってからは、段々と儒教思想が浸透するようになるが、蒙古種族を撫で治めるためには必要なものであることから、清

の皇帝はその後もずっと喇嘛教を信仰していた。

今日、「通論」を読むと時代背景が異なることから、言葉の表現に違和感を覚える点が多くある。しかし、これらの違和感よりもっと重要なのは内藤史学の体系である。「通論」の目次は、清朝歴史に対する内藤の学問体系を明確にあらわしている。これは戦後、日本の中国専門家が語る中国現代史の体系と大きく異なる。戦後の中国専門家は革命・ナショナリズム・近代化・伝統・国際環境といった要素が中心となるファクターを統合して時代ごとに述べる共和国史（例えば、天児慧（一九九九）『中華人民共和国史』岩波新書）が代表的で、政治権力を中心に議論が展開される。しかし、内藤の学問は政治権力だけに留まらず、文物、経学、音楽といった幅広い分野を網羅している。専門の細分化が進んでいる今日の中国研究者にとって、内藤湖南のような学問体系を目指すことは不可能であるが、内藤の学問はさまざまな研究分野の原点として読まれるべきクラシックである。

●中根千枝（一九六七）『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』講談社現代新書

日本にいる留学生と会話すると、「日本は閉鎖的だ」、「日本人は外国人を差別する」、「日本人は本音を言わない」という話をよく耳にする。日本で生活すると、最初に感じるのが母国文化との差異であり、日本人の考え方、価値観、行動様式に疑問を覚えることが多い。これらの疑問を周りの日本人に問いかけても満足のいく答えは少なく、日本社会に対する失望感ばかりが増える。学業に専念することだけではなく、相手国の社会を理解することも留学の醍醐味であるが、日本社会というのはなかなか理解しにくい側面が多い。このあいまいで難しい日本社会を理解する方法論を提示してくれるのが『タテ社会の人間関係』である。

著者は序論で和服を仕立てる際に用いる道具を事例に議論を始める。「センチ尺」を使って和服を仕立てる場合、端数がでて非常に不合理な寸法となるが、「鯨尺」を使うとややこしい端数がなく合理的な寸法になってくるのである。本書の目的はまさしく「日本社会の構造を最も適切にはかりうるモノサシ（和服における「鯨尺」）」を提出することであり、これが社会人類学でいう「社会構造」（Social Structure）への探求であると著者はいう。

日本社会を分析するに当たって、著者が最初に提示した分析のカギは「資格」と「場」である。ここでいう資格というのは社会的個人の一定の属性をあらわすもので、場というのは一定の個人が集団を構成している場合を指す。例えば、教授・学生というのはそれぞれの資格であり、大学というのは場である。日本社会は「場、すなわち会社とか大学とかいう枠が、社会的に集団構成、集団認識に大きな役割をもっているということであって、個人のもつ資格自体は第二の問題となってくる」と著者はいう。

枠の中にいる人同士では強い一体感が生まれる一方で、枠の外にいる同一資格者との間には溝ができ、「ウチ」と「ヨソ」の意識が強くなる。著者がいうに「日本社会は、全体的にみて非常に単一性が強いうえに、集団が場によってできているので、枠をつねにはっきりしておかなければ、他との区別がなくなりやすい。そのために、日本のグループは知らず知らず「ウチの者」、「ヨソ者」意識を強めることになってしまう」のである。

日本社会を分析するに当たって、著者が提示したもうひとつのカギは「タテ」と「ヨコ」の関係である。著者によると、『ヨコ』の関係は、理論的にカースト、階級的なものに発展し、『タテ』の関係は親分・子分関係、官僚組織によって象徴される」。日本社会では同じ資格、身分を有する者の間には常に序列による差が意識され、序列は職種・身分・位階（いかい）による相違以上の重要性を持つのである。

「場」と「タテ」関係を重要視する日本社会の特徴こそ、著者がいう日本社会をもっとも適切にはかりうるモノサシである。また、この特徴を生み出す基盤となっているのが、日本社会の文化的「単一性」にあると著者は主張する。

『タテ社会の人間関係』は出版されてから四〇年あまりの年月が立ち、日本社会も大きく変わっているが、今読んでも新しい示唆に富んでいる。これから日本社会に対する理解を深めたい人には最初にお勧めしたい一冊である。

（にん　てつ／アジア経済研究所東アジア研究グループ［中国政治］）